

くらしと協同をたずねて—国内編

01

鳴門で学ぶ協同

—鳴門市賀川豊彦記念館とドイツ館—

青木美紗 (奈良女子大学 講師)



鳴門市賀川豊彦記念館前

はじめに

新型コロナウイルス感染症の発生と拡大に伴い、「新しい生活様式」が求められるようになってきているが、改めて、競争ではなく分かち合いや協同が今後の社会には必要であるように感じている人は多いのではないだろうか。協同や分かち合いは、知識はあってもなかなか実感を持つことが難しいものであるように思う。おそらく知識の上に、異なる立場の人と共感し体験が伴って初めて腑に落ちることも多いものなのかもしれない。そのためには、学習と経験を繰り返すことが必要であると感じる。

そこで今回は、協同について学ぶことができる、鳴門市賀川豊彦記念館と鳴門市ドイツ館を紹介したい。両施設は徳島県鳴門市に位置し、両施設間は徒歩で移動できる距離にある。本稿の内容は、2018年6月9日に、大学生協関西西北陸ブロック教職員委員会が主催した「学びと交流の徳島ツアー」というブロック活動に筆者が参加したときのものである。そのため、やや情報が古いものもあるかもしれないことを付記させていただく。

鳴門市賀川豊彦記念館

賀川豊彦に関する記念館や資料館は、日本全国に5か所存在し、鳴門市賀川豊彦記念館はそのうちの一つである¹⁾。本記念館は、賀川豊彦鳴門記念館設立を目指す会・賀川豊彦鳴門記念館建設実行委員会の活動により、3,000人近くの方々からの寄付によって2002年春に完成し、完成後鳴門市に寄贈された施設である。鳴門市営の記念館であり、一般社団法人うずしお観光協会が指定管理者として運営しており²⁾、市が運営している点が興味深い。

この記念館が位置する現鳴門市大麻町の東馬詰は、賀川豊彦の父の本家があったことから、4歳



鳴門市賀川豊彦記念館の外観



記念館前の石碑「愛は私の一切である」

で両親を失った賀川豊彦が幼少期から明治学院高等部神学科に入学するまでを過ごした土地である。そのような地に、後の協同組合運動など多くの社会運動に貢献した賀川豊彦が生きた証を残すべく、本記念館はさまざまな資料を展示している。

外観はレンガ造りのおしゃれな建物になっており、その館内は、3つの展示室と大会議室がある。第1展示室から第2展示室にかけては、賀川豊彦の生誕から社会運動に貢献するまでの歴史について学ぶことができる。彼が実際に使用していた幼稚園児向けの玩具なども展示されている。第3展示室には阿波農民福音学校を開いていたときに使用されていた黒板や教卓、講義墨書の他、手紙や書籍など、他の資料館や記念館には見ることができない資料等を見ることができる。

また、絵本の読み聞かせ会や友愛読書会、賀川豊彦学習講座なども定期的に行っており、協同を学ぶ人たちの交流の場の提供している³⁾。訪問時の2018年は賀川豊彦生誕130周年ということもあり、シンポジウムなどのイベントも開催されていた。協同組合に携わる人たちには、是非一度足を運んでいただきたい場所である。

鳴門市ドイツ館

鳴門市賀川豊彦記念館から徒歩2～3分のところに、西洋風の外観をもつ鳴門市ドイツ館がある。ここも鳴門市賀川豊彦記念館と同様、鳴門市営の記念館であり、一般社団法人うずしお観光協会が指定管理者として運営している施設である⁴⁾。なぜこの地にドイツ館があるのかというと、鳴門市大麻町坂東には、第一次世界大戦中（1917年～1920年の約3年間）に旧日本軍の捕虜となったドイツ人捕虜を収容していた板東俘虜収容所があり、この収容所は捕虜に対して人道的な対応をしたことで有名になったことが背景にある。その歴史を記念館として残すために1972年にこの施設は設立された。

捕虜の収容所と聞くと、劣悪な生活環境の中、強制労働を強いられるというのが一般的なイメージであり、当時の多くの捕虜収容所においても、そのような非人道的な対応をしていたという。しかし板東俘虜収容所の所長であった松江豊寿と収容所の管理職員である部下たちは、捕虜も同じ人間であるという考えから、彼らの人権を尊重し、一日2回の点呼以外は自由な生活を許していたそうだ。松江所長は何度も旧日本



鳴門市ドイツ館の外観



第九が演奏されて100周年

軍幹部から、人道的な扱いをやめるよう命令されたが、それには断固として従わなかった。

捕虜の多くはドイツで高い技術を有した職人であったことから、収容所の中では、それぞれの得意分野を生かした活動が盛んにおこなわれるようになった。パン職人がパンを製造したり、スポーツ施設を収容所の一角に設置したりと、生活を充実させる設備や活動がどんどん広がったという。そして松江所長は、捕虜たちを収容所の外に出ることも許可し、徐々に地域住民との交流も盛んになっていったそうだ。

たとえば、地域の子どもたちに捕虜たちが器械体操を教えたり、地域の人にパンの作り方を教えたりなど、文化交流が深まっていったという。このときにドイツ兵からパン作りを教わった藤田只ノ助に弟子入りした方がパン屋を開業し、そのお孫さんが現在も「ドイツ軒」というパン屋を鳴門市で営んでいる。このように地域の人たちと捕虜たちが交流を深めることによって、日本にも多様な文化の発展をもたらした。

そして捕虜たちが帰国することになったとき、捕虜たちは地域住民に感謝の気持ちを伝えたいという想いで、自分たちで楽器を自作し、『歓喜の歌』として知られる

ベートーヴェンの第九を地域住民に演奏して贈った。第九の女性パートを男性でも歌えるように変更するなどの工夫もしていたそうだ。これがアジアで初めて演奏された第九であったという。2018年6月1日は、ちょうどこの第九が演奏されて100周年という記念すべき年であった。当時の捕虜たちが楽器を自作してまで伝えたかった感謝の気持ちが、現在の日本に浸透していると思うと感慨深いものがある。

さらに、捕虜たちが帰国したのち、収容所自体は解体されるのだが、日本で亡くなった捕虜たちのために地域住民がお墓を立て、毎日お参りに行っているそうである。



道の駅第九の里で販売されていたドイツ軒のパン

ドイツ館の外では、今でも当時の交流が続けられているのである。

ドイツ館では、以上のような坂東俘虜収容所での取り組み内容、地域住民との交流によって生じた文化、当時の交流や第九が演奏された時の様子などを史料で提供しており、多くのことを学ぶことができる。また、賀川豊彦記念館とドイツ館の間にある道の駅「第九の里」ではドイツ軒のパンも購入することができ、知識を身につけたあとでドイツから伝わったパンを堪能することができる。



第九の演奏が聴けるミニシアター

しいと願う。

現在、新型コロナウイルス感染症の影響で生活苦に陥る人がいる一方で私腹を肥やそうとする人がいたり、暴力と権力で人々を抑え込もうとする人たちが目立っている。将来世代が豊かな生活を送れるようにするためには、暴力や自分だけよければいいという考え方では通用しないことを、歴史が教えてくれているように感じる。協同組合に関与している人にも、そうでない人にも、情勢が落ち着き次第、両施設と道の駅第九の里に足を運んでいただき、五感を使って協同について学んでいただければ幸いである。

注

- 1) 鳴門市賀川豊彦記念館以外の記念館や資料館としては、賀川豊彦松沢資料館、神戸賀川記念館、本所賀川記念館、コープこうべ協同学苑資料館がある。
- 2) 鳴門市賀川豊彦記念館ホームページ (<https://www.kagawakan.com/>) より。2020年6月8日閲覧。
- 3) 新型コロナウイルス感染防止のため、現在は中止や延期となっている。訪問時にはホームページを参照されたい。
- 4) 鳴門市ドイツ館ホームページ (<http://doitsukan.com/>) より。2020年6月8日閲覧。

後世に残したい想い

以上見てきたように、鳴門市賀川豊彦記念館とドイツ館では、人道的な支援や活動によって社会に大きく貢献した賀川豊彦と松江豊寿の考え方や活動内容、地域住民や社会に与えた功績を学ぶことができる。どちらも100年も前のことであるにもかかわらず、現在の社会においても繋がっていることが多く、社会や文化の発展には、立場の異なる他者への配慮が重要であることを教えてくれる。個人的な意見ではあるが、このような人道的支援によって社会に貢献した人たちを歴史の教科書で取り上げてほ